

スポーツの効用

以前よりスポーツや書画楽の意義を強調してきたが、わたしが考えるスポーツの功罪をすこしく述べます。校庭に豆を植えて食った遠いわたしの時代のことではなくて、この10数年前の卑近な経験に基づきます。

1 野球、サッカー、卓球、などのスポーツ少年団ないしはトレーニングセンターがありました。父兄のボランティアや元日本代表選手などが指導していました。見ていると勢揃いしてワンパターンのかけ声で練習し、上手な子どもは特訓されていました。塾のように月謝を払っているわけではないので、試合に勝とうとして下手なものは押しのけられるのは当然です。わたしは、幼少年期にもっぱら体力と技能を競わせることは奨励しかねました。スポーツが単に幼少年を調教していると見えました。活発にスポーツに励んで全国大会に出たりしても、身体は鍛えられたが精神は鍛えられなかったと言わざるを得ない人をうんざり見てきました。

2 わたしが考えるスポーツの効用は違います。1点の失点、1センチの差、1回のミスの結末をスポーツは露わに示します。敗戦の悔悟、事実を受け入れる苦痛、再出発の決心などを、スポーツは直裁に迫ります。今日の平穏時代にはスポーツのように剥き出しの感情を経験させるものは少年期にはないように思えます（わたしの時代には戦難があった）。少年が経験した感情を知的な精神に昇華させるには、そのように率いる指導者が要ります。自分の経験を知的精神に昇華させた人間がそのように指導できると思うのです。体力と技能を調教されただけの指導者は少年を調教することしか知らないでしょう。感情経験こそ少年期の財産で、得られるならばスポーツでなくてもよいと思います。どの場合も指導者こそ重大です。

3 子供の手足の骨折はすぐ治りますが、精神の骨折は不治です。すこし特殊かもしれませんが、スポ少は敬遠して、小学生時代に人工のコートやルールと無縁の、まちがえば怪我するかもしれない無言の本物のなかへ誘うことも優れた仕方です。ほんものの登山の怖れ、不安、緊張、集中、疲弊などの経験です（子供はむろん、そんなコトバで経験しているわけではない）。しばしば経済的余裕が云々されますが、真昼間に連れ立ってくる母親連のレストラン昼食代や買い換える新車代やファミコン代やゴルフ代やパチンコ代、それに塾の費用に比すれば、何ほどのこともないはずです。自分たちができるなかで工夫できるはずです。好きなこと、気乗りのしたことだけを連ねては知力も情緒力も鍛えられません。

4 事のついでに申しますが、この意味において青少年の「奉仕活動・ボランティア」の奨励を、わたしは強く懸念します。ただいまの能力をそのまま横移しにただけで成

り立つ類の、つまりエネルギー不要の行為が他からの賞賛にありについては、社会性の精神は育たないと思います。さもなくば、またもや大がかりな調教です。補欠はレギュラーの失敗を歓迎し自分の出番を喜ぶものです（本気の者はそうでしょう？）。チームメートの失策を非難し、しかし自分もまた間違えて試合を落とした、錯綜した感情の経験を知的に統合して、やがて本物の社会性が獲得されるものです（10代後半頃に）。

5 怖がって飛び込めずに水辺でおしゃべりしている者を水に飛びこめるようにするカリキュラムと、水に飛び込んでいる者に泳ぎを習得させるカリキュラムをゴったまぜにして混乱しているのが現状と思います。これでは実りがないと思う、と以前にも述べました。もちろん、それぞれに分数のレベルから医学のレベルまで水準がありますが、後者を対象としてしか「高等教育」は成立しないでしょう。前者は幼少年期教育の領分です。この領分の中でスポーツは、指導者が良ければ最良と言ってもいいくらいの材料と思うのです。

（高等教育フォーラム 改 1998）